

月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.116

ザナドゥに
「グリムワルドの夜」が到来!
も～っと集まれ！ファルコム学園

『軌跡』シリーズ始まりの
物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡
ファルコムニュース

エステルが『閃の軌跡IV』の
衣装となって登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』

執行者の侵入に立ち向かう
フィリップと親衛隊たち、だが…
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

10月に無料配信される大型アップデートの情報が到着!

英雄伝説 創の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

3 目次

4 大型アップデートの情報を詳しくご紹介！
『英雄伝説 創の軌跡』

10 も～っと集まれ！ファルコム学園
新久保だいすけ

19 英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～
啄木鳥しんき

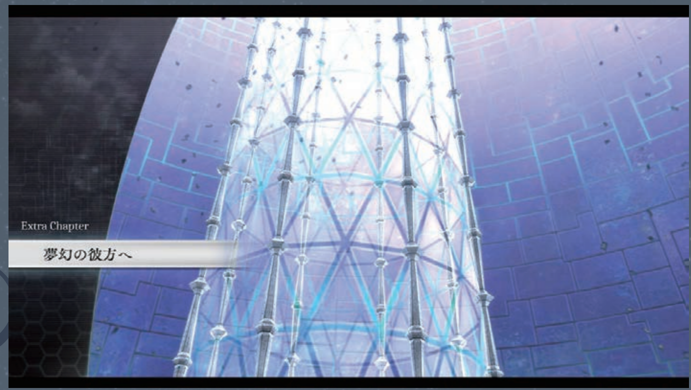
38 ファルコムニュース

40 新章更新！　夏らしい衣装も続々登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』

42 『軌跡』シリーズの始まりを振り返る！
英雄伝説 空の軌跡 2
黒のオーブメント
著：はせがわみやび　イラスト：ワダアルコ

大型アップデート「夢幻の彼方へ」とは？

●『真・夢幻回廊』に新たな階層「深層領域」を追加





●プレイアブルキャラを追加

●新規エピソード、ミニゲームを追加





●レベル上限を180から250に引き上げ
●難易度「アビス」を追加
●ミニゲームに新モード、難易度を追加
●ゲーム内書籍「暁闇の射手シュンラン」追加

続いてはアップデート情報の詳細をチェック！

大型アップデート「夢幻の彼方へ」を大紹介！

THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】



『創の軌跡』の発売から１ヶ月が経過し、そろそろクリアしたという人も多いはず。そんなみなさんに朗報！　10月１日になんと大型アップデート「夢幻の彼方へ」が無料配信されることが判明した！　今回はその内容をじっくりとチェックしていこう！

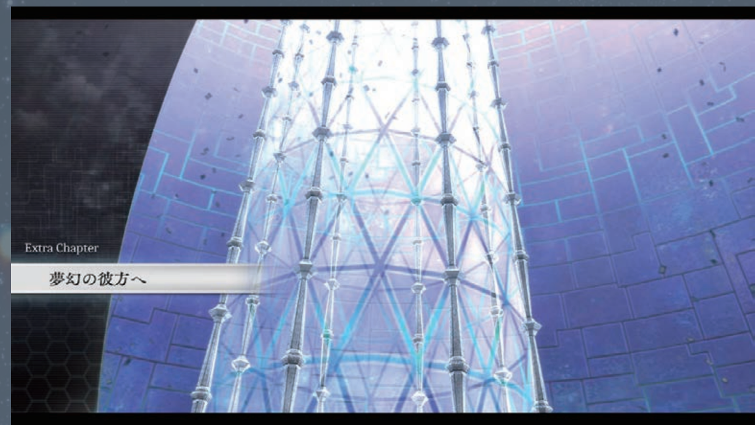
『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

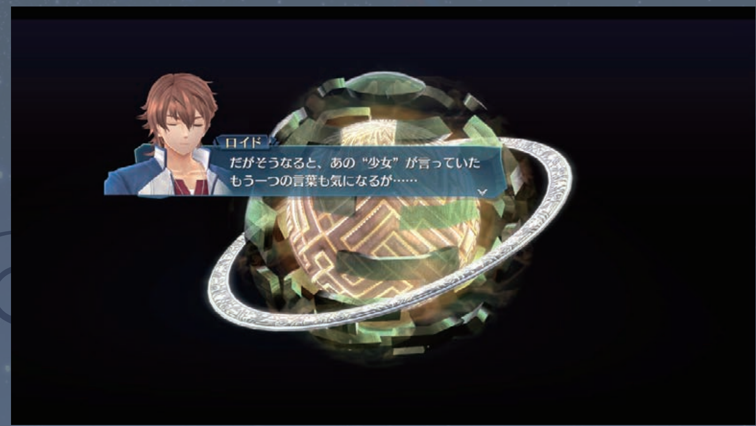
タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：好評発売中
ジャンル：ストーリーRPG　**対応機種**：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人
小売価格：[通常版] 7,800円（税抜）[Platinum マイスター BOX] 10,800（税抜）
[ダウンロード通常版] 7,590円（税込）[デジタルデラックス版] 11,000円（税込）
[シーズンパス] 4,180円（税込）　**CERO レーティング**：C

　※画面は開発中のものです。

真・夢幻回廊《深層領域》

全キャラクターを自由に編成して進めていくやり込み型のランダムダンジョン『真・夢幻回廊』に
第５層以降の《深層領域》が追加！ 《深層領域》で生じた"異常"の原因を探るため、
さらに深い階層に挑戦していこう。また、アップデートにあわせてオプション項目で、
敵のレベルを強化することが可能に。より歯ごたえのある戦いを楽しみたい人は、こちらもチェックしてみよう。







＼新たに追加されたエピソードのあらすじをチェック！／

エピソード１ 《想い出の眼差しは熱く》

ギリアス・オズボーンの遺品整理のため、バルフレイム宮を訪れていたリィンは皇帝ユーゲントⅢ世から１枚の焼け焦げた写真を受け取る。
その日の夜――
リィンは深い眠りの中で《鉄血宰相》の手記に関する、ある不思議な夢を見ることになる。
帝国のため、愛する者たちのため。闘争に導く"鉄血"として、彼は動乱の世を如何に生きたのだろうか――。





エピソード２ 《第Ⅱ分校修学祭》

存続が決まり、来年度から生徒数を増やすことが決定したトールズ第Ⅱ分校。
オーレリア分校長の鶴の一声で入学希望者や一般の来客に向け、今の分校の姿を披露する"修学祭"が特別開催されることとなった。
そんな中、自ら犯した大罪のケジメをつけるため、密かに退学を決意していた新《Ⅶ組》のアッシュはひょんなことから"修学祭"実行委員に推薦されてしまうのだが……。





エピソード3 《ブライト家の休日》

クロスベル解放作戦が終わり、時間を見つけて温泉郷ユミルへとやってきたブライト一家。
レンが家族となって以来、４人での家族旅行は初めてのこと。
王国軍での仕事が忙しく、中々顔を合わせることが無かったレンとカシウスの２人はエステル＆ヨシュアが見守る中、家族での一時を満喫しようとするが……。





エピソード4 《踏み出す一歩》

士官学院での出会いがきっかけで想いを通じ合わせるようになったメアリー教官とマカロフ教官。
二人の想いは確かなものの、ゼムリアを襲った世界大戦以来、何の進展もないまま半年が過ぎ去ろうとしていた。
そんなある日――
当初から二人の交際に否定的だった父・アルトハイム伯爵によりメアリー教官の見合い話が持ち上がってしまう。
果たして、彼女の前に姿を現した男性とは？





新ミニゲームはカード使った勝ち抜きバトル!

「VM(ヴァンテージマスターズ)」

アップデートで新たに追加された「VM」は様々なカードでデッキを組み対戦相手と戦っていくイベント形式で行われる勝ち抜きゲームとなっている。本編や、夢幻回廊では対戦できなかったキャラクターたちも新たな VM マスターとして参戦予定とのこと。最強のデッキで強敵に挑んでいこう！





新たな「軌跡」シリーズへの“架け橋”となる謎のエピソードがノベル形式で登場！

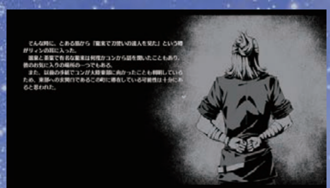
「創の軌跡」の次回作となるシリーズ最新作への“架け橋”となる３編のショートストーリーがノベル形式でエピソードに登場。そのマル秘エピソードについても情報が到着した！

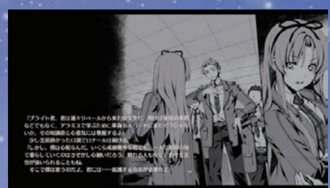
《創まりの先へ》

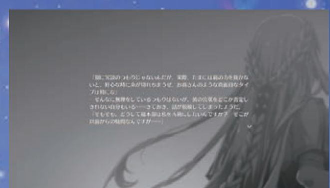
これは、情報の海を漂う一欠片の記録
今よりほんの少し未来の話

果たして[redacted]が導き出した残像か
それとも時空の狭間から漏れ出た微かな投影か

知る者はいない――

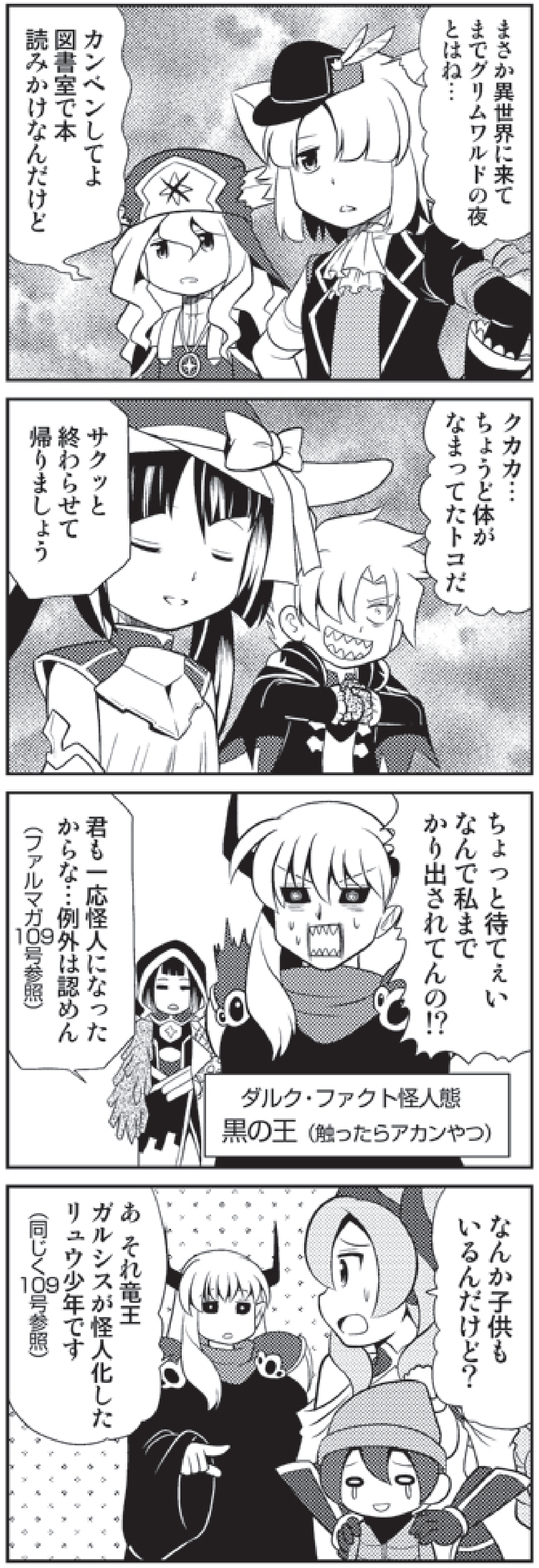








怪人あつまれ!



怪人に近い者



アドルの敵



こわいかお



アプリリスの力



クリキン登場



現地向けアレンジ



いちばん好きなもの



白猫の質問



いいニュースと悪いニュース



これまでのアドル



リリアの願望



も〜っと集まれ!負の想念



王の疑問





空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
これは これは
大層な肩書を お持ちのようで
そんな御仁でさえ 我らの力量を 見誤るとは… 残念ですな
おや
そうでございますか
失礼ながら 皆様からは 凄まじい鬼気を 感じておりますが
人を超越した…
まるで 魔人の如し ですな
それを わかっていながら
なにゆえ 我らに刃を 向けるのか
私に振るえる武器が 刃だっただけの ことでございますよ



異世界《ザナドゥ》に 勇者よ再び！
も～っと集まれ！
ファルコム学園
1
著者：新久保だいすけ
定価：本体900円＋税
学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！ 果たしてその理由とは⁉
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！
ISBN:978-4-8021-3138-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©DAISUKE ARAKUBO
©2019 FIELD-Y
FB ファルコムBOOKS
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

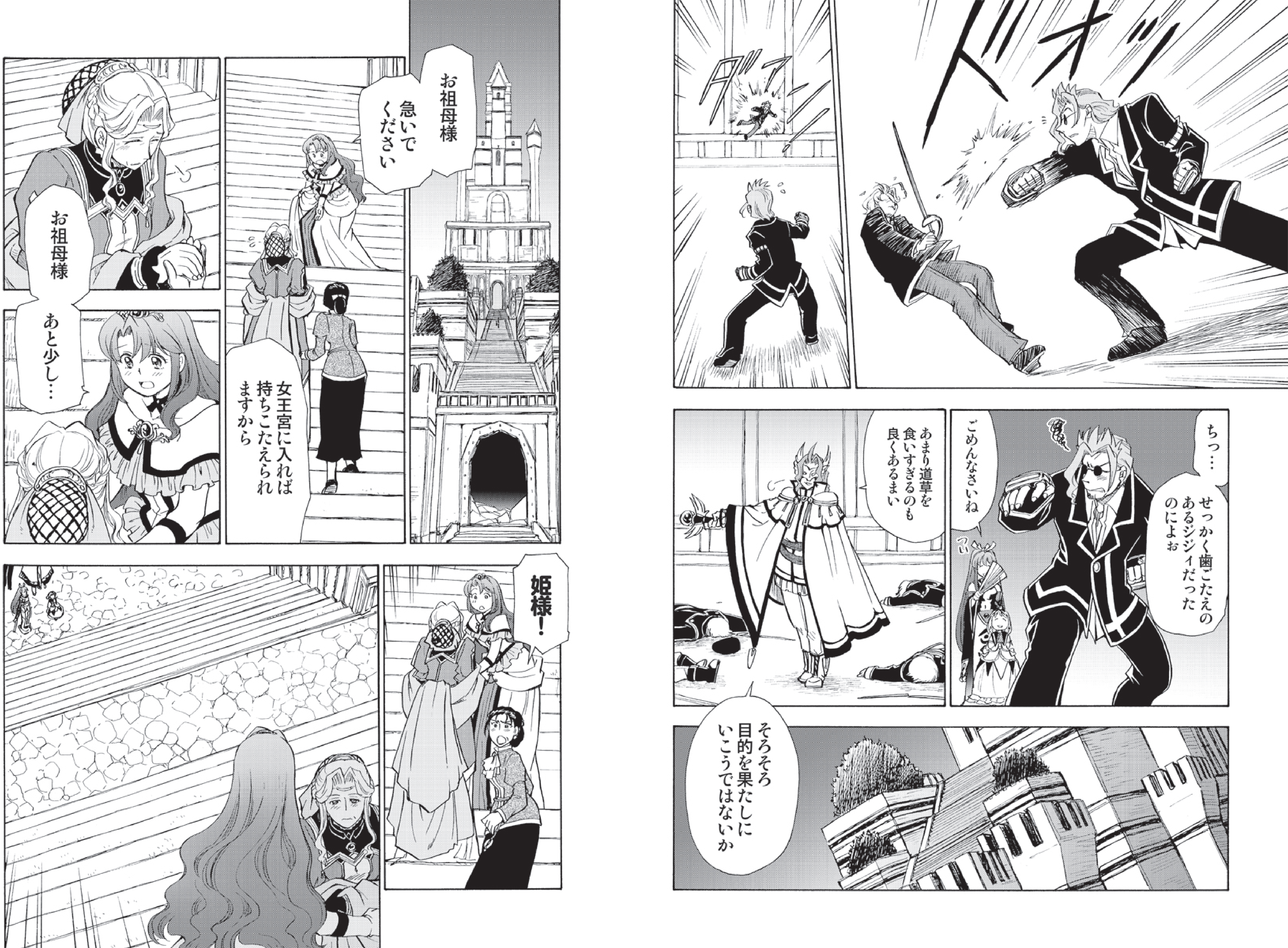

私どもは
私どもの大切な主君をお護りするために
自らの武器を以って
敵を退けるだけでございます！
ははは
これはおもしろい！
その誇り高い忠義に免じて
少しつきあって差し上げようか

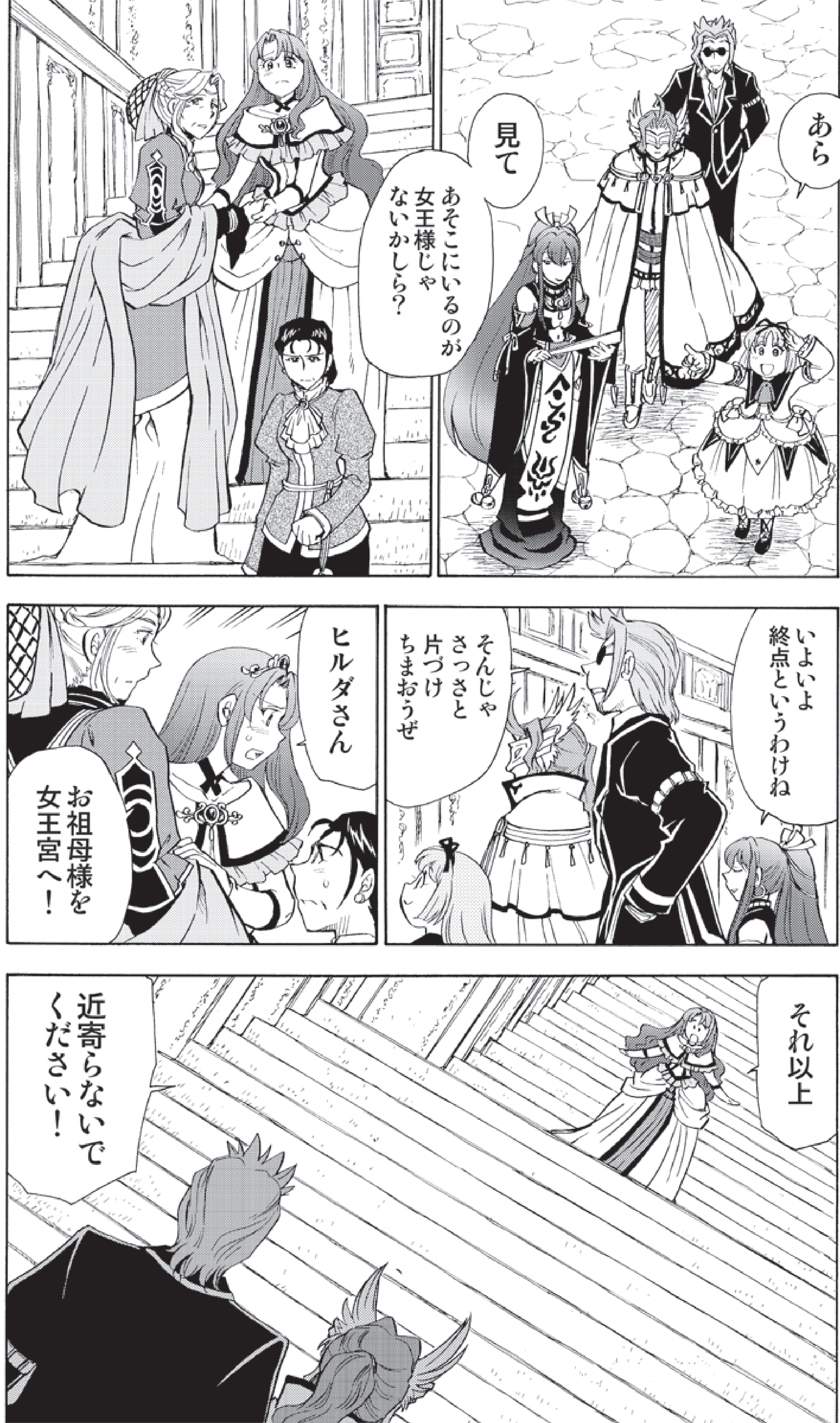

フッ

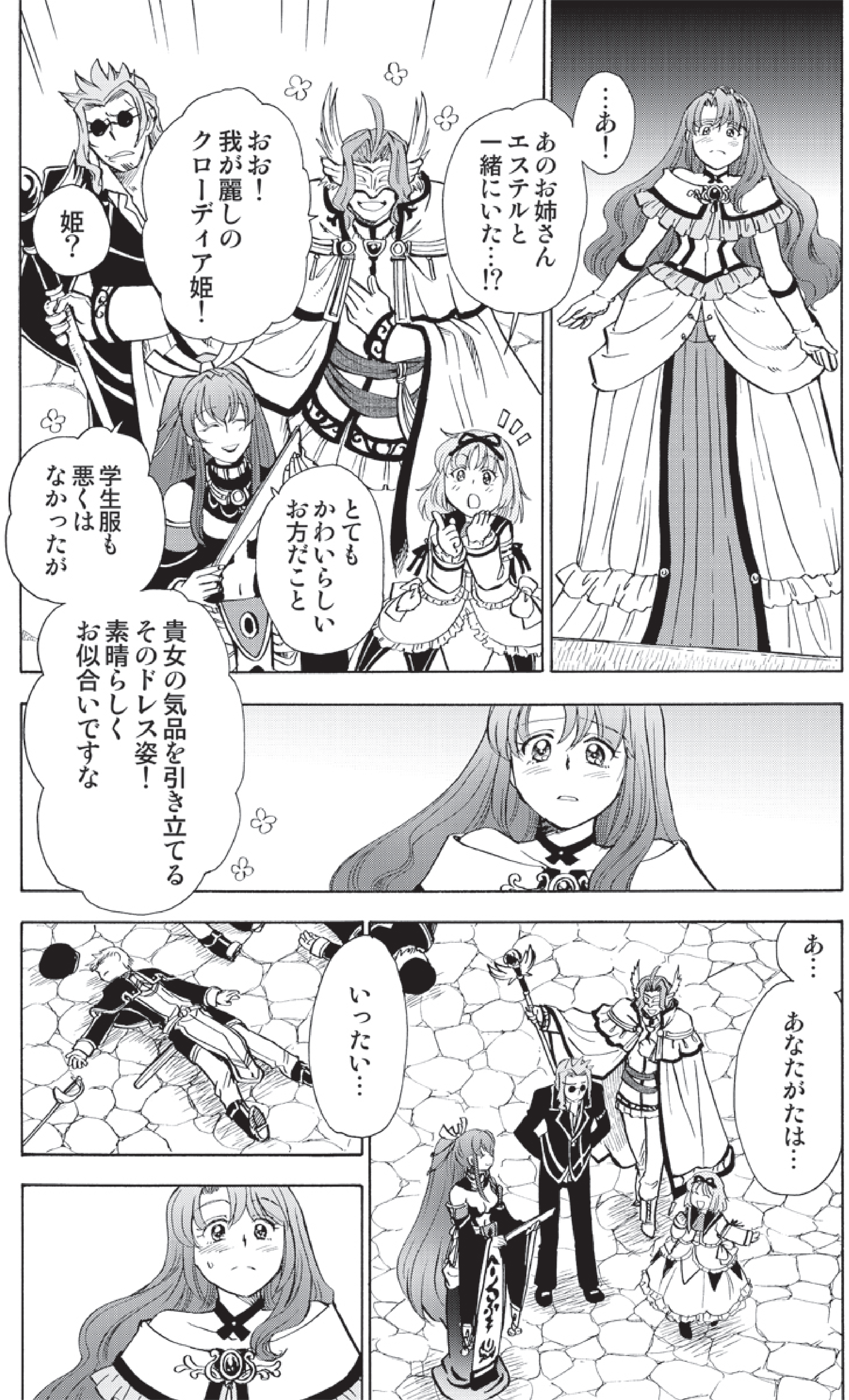


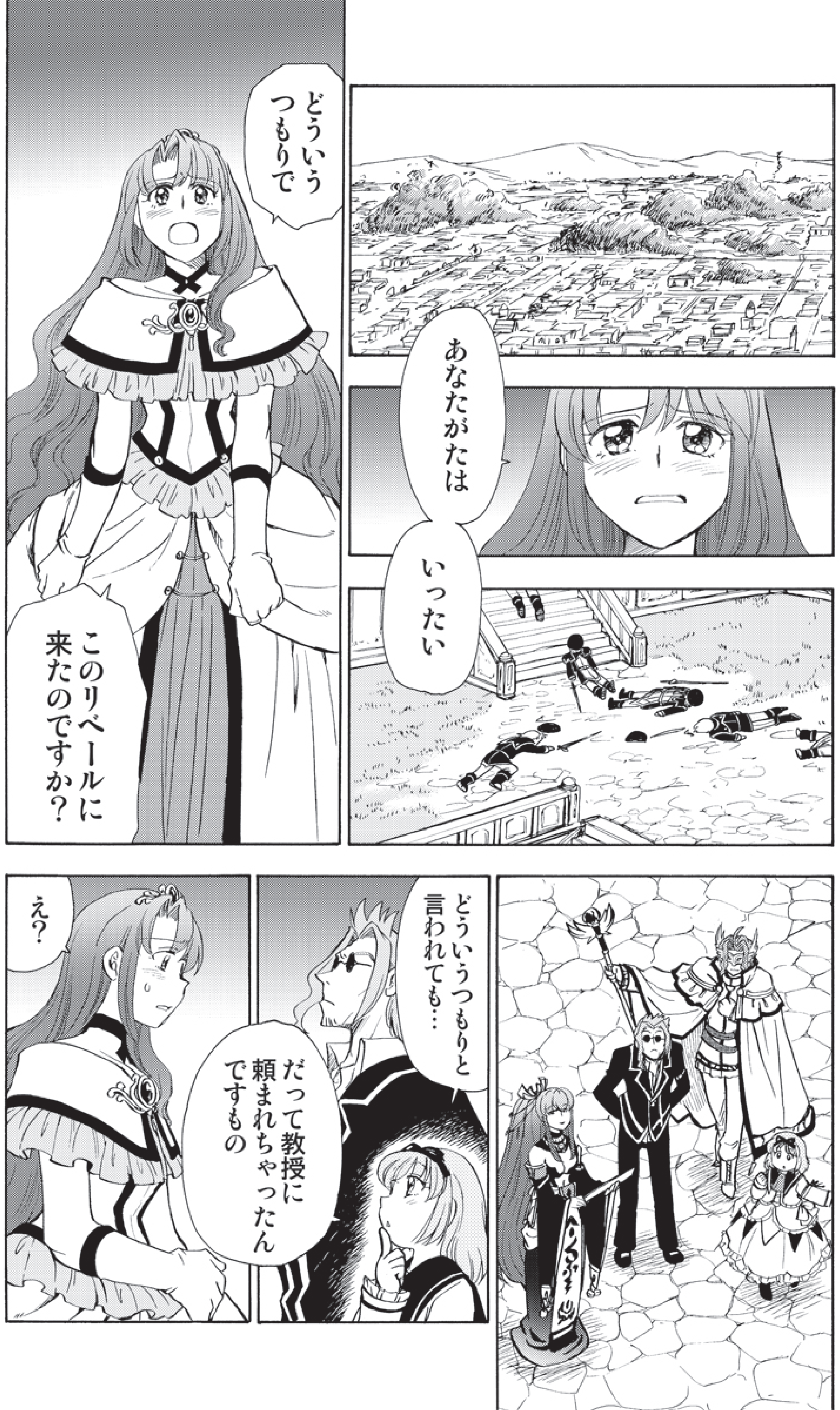

ヒュオ
あらあら どうしたの ブルブラン
ふふふ 少しは楽しませてくれそうね
みなさん！よい動きです！
なんとしてもここで食い止めますぞ!!

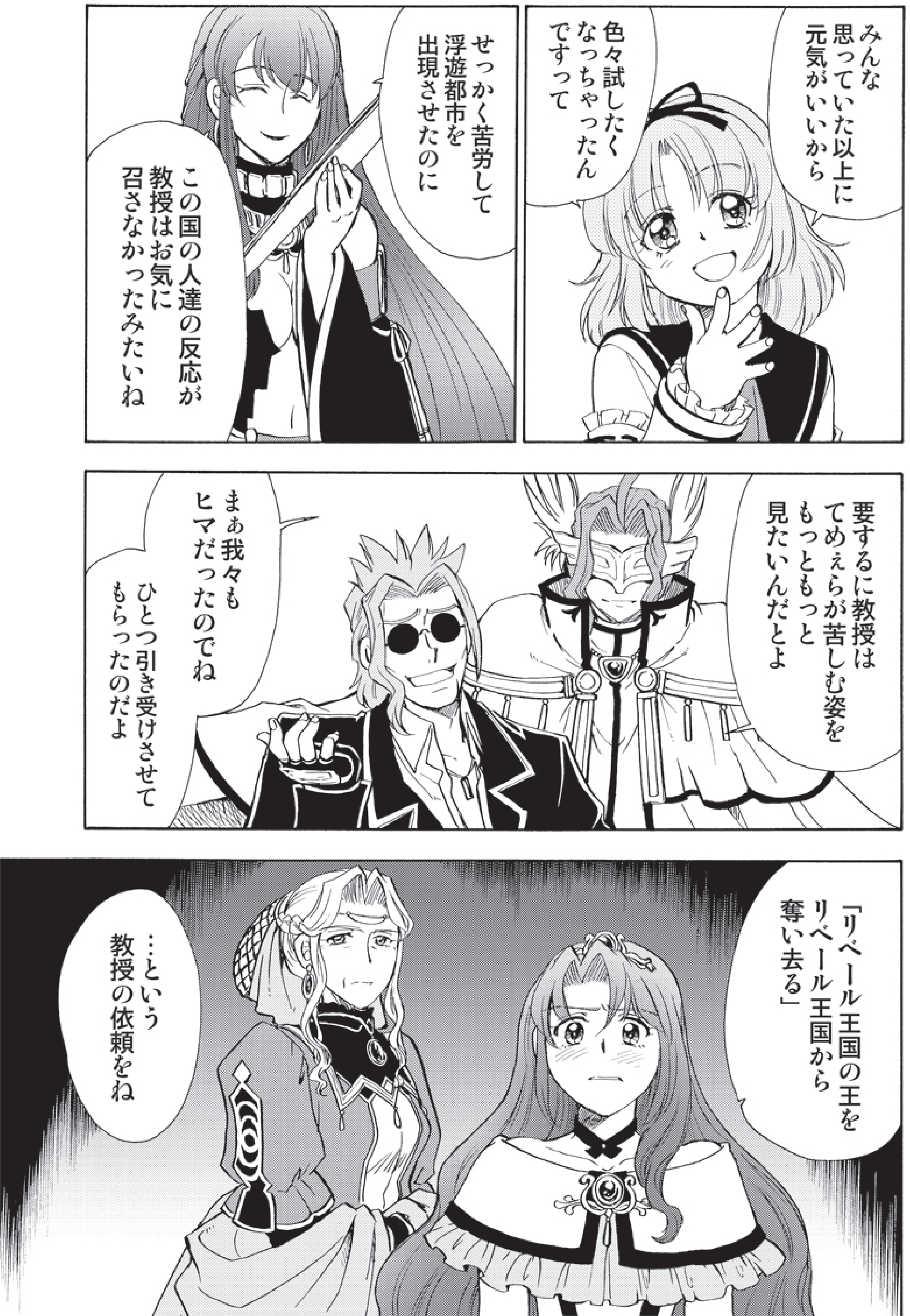

フィリップ…
親衛隊も…
皆
リベールのために…
なのに…
この私が…
こんなところで高みの見物か…!
わ…
わ…
私も!
助太刀するぞ!!
魔人どもめ!
これ以上の狼藉はこのデュナンが許さぬ!
ビュオッ
そっ…
オッ!!
あ
あ
あ~~っ…
閣下…


ちっ…
せっかく歯ごたえのあるジジィだったのによぉ
ごめんなさいね
あまり道草を食いすぎるのも良くあるまい
そろそろ目的を果たしにいこうではないか
お祖母様
急いでください
女王宮に入れば持ちこたえられますから
お祖母様
あと少し…
姫様!


あら
見て
あそこにいるのが女王様じゃないかしら？
いよいよ終点というわけね
そんじゃさっさと片づけちまおうぜ
ヒルダさん
お祖母様を女王宮へ！
それ以上
近寄らないでください！

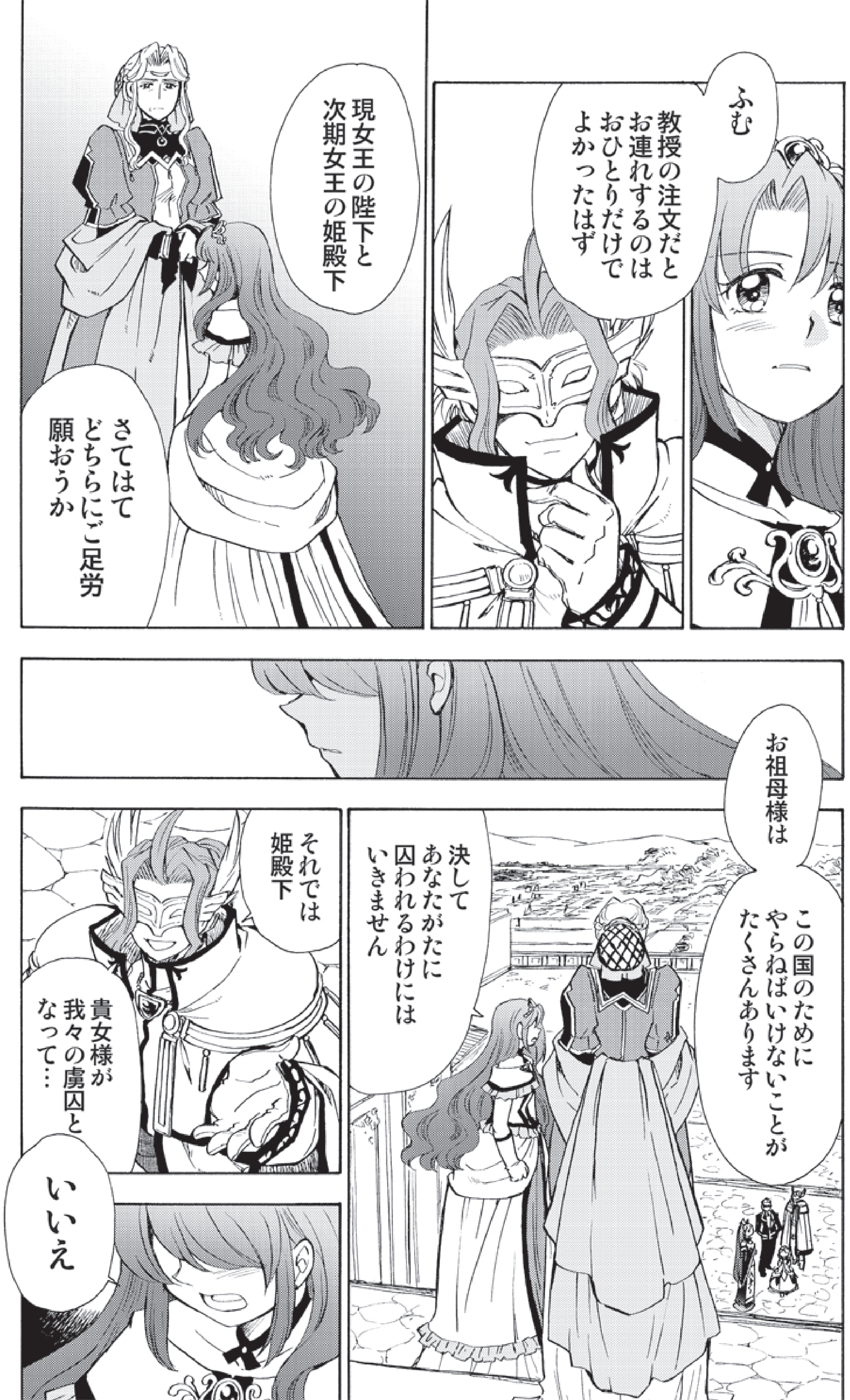

…あ！
あのお姉さんエステルと一緒にいた…!?
おお！我が麗しのクローディア姫！
姫？
とてもかわいらしいお方だこと
学生服も悪くはなかったが
貴女の気品を引き立てるそのドレス姿！素晴らしくお似合いですな
あ…
あなたがたは…
いったい…


どういうつもりで
あなたがたは
いったい
このリベールに来たのですか？
どういうつもりと言われても…
だって教授に頼まれちゃったんですもの
え？

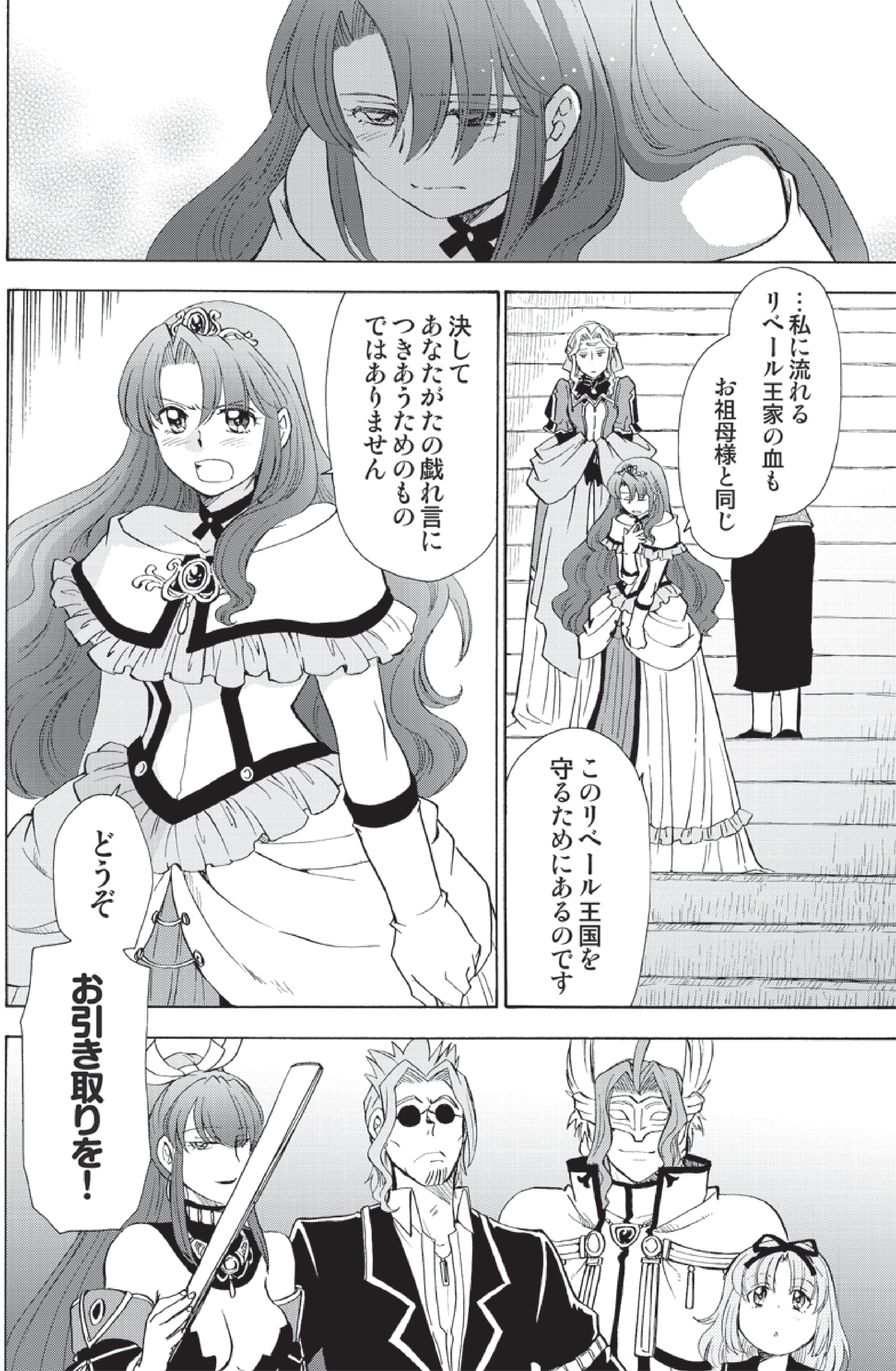

みんな思っていた以上に元気がいいから
色々試したくなっちゃったんですって
せっかく苦労して浮遊都市を出現させたのに
この国の人達の反応が教授はお気に召さなかったみたいね
要するに教授はてめぇらが苦しむ姿をもっともっと見たいんだとよ
まぁ我々もヒマだったのでね
ひとつ引き受けさせてもらったのだよ
「リベール王国の王をリベール王国から奪い去る」
…という教授の依頼をね



そ…
そんなことのために
このリペールを…
確かに悪趣味だが教授は
頭を狩られた国がどんな風に死んでいくのかを見るのはちっとおもしろそうだと思ってよ
…話はわかりました
ならばわたくしひとりを虜囚にすれば済む事でしょう
これ以上余計な犠牲を出すのはおやめください
いけませんお祖母様！
囚われるならば私が……



ふむ
教授の注文だとお連れするのはおひとりだけでよかったはず
現女王の陛下と次期女王の姫殿下
さてはてどちらにご足労願おうか
お祖母様は
この国のためにやらねばいけないことがたくさんあります
決してあなたがたに囚われるわけにはいきません
それでは姫殿下
貴女様が我々の虜囚となって…
いいえ


…私に流れる
リベール王家の血も
お祖母様と同じ
このリベール王国を
守るためにあるのです
決して
あなたがたの戯れ言に
つきあうためのもの
ではありません
どうぞ
お引き取りを!


言うじゃ
ねぇか
リベール王国を
守る?
自分の身さえ
守れねぇ奴が
何を?
どうするって!?

次回に続く


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks


英雄伝説
空の軌跡SC 4
ソラノキセキSC
～絆の在り処～
結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う、誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第4巻！
やっとあたしは、ヨシュアに届くことができた。
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI　©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『イース・オリジン スペシャルエディション』発売決定！

『イース・オリジン スペシャルエディション』が2020年10月1日（木）、3gooより発売されることが決定！
『イース・オリジン スペシャルエディション』は2006年に日本ファルコムより発売されたPC向けパッケージ商品『イース・オリジン』初回限定盤をイメージして制作された特製レトロサイズボックス仕様。オリジナル版『イース・オリジン』の世界観を踏襲しつつ、本作を象徴する双子の女神レアとフィーナをフィーチャーしたデザインとなっています。





【同梱アイテム】
①ゲーム本編
②2枚組オリジナルサウンドトラック
（ゲーム内楽曲全37曲を2枚組CDに収録）
③アートブック-スペシャルエディション-
2006年に発売されたPC版『イース・オリジン』
初回限定盤の特典オフィシャルビジュアルブックをイメージして編纂された72Pのアートブック。
④オリジナルポスター
古代王国イースを治める双子の女神、レアとフィーナをフィーチャーした豪華版ポスター。

■ PlayStation®4/Nintendo Switch™ 版『イース・オリジン』について
本作は、2006 年に日本ファルコムが PC 専用タイトルとして発売した同名作品をベースに、フランス・パリに本社を置くゲーム制作会社 Dotemu が各プラットフォーム向けに移植・開発を行った商品です。
尚、PlayStation®4/Nintendo Switch™ 版ではオリジナル版の日本語のほか、英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語の多言語にも対応しています。

【Dotemuについて】
Dotemuは世界各国の名作・クラシックゲームをPC、スマートフォン（iOS/Android）、コンソールなど現代のプラットフォームに移植・リメイクしてリリースすることに特化したフランスのゲーム制作会社。2007年の創設以来、同社のチームは株式会社スクウェア・エニックス、株式会社SNK、UBISOFTグループといった企業と協力し、数々のタイトルをリリース。



■PlayStation®4/Nintendo Switch™
『イース・オリジン スペシャルエディション』商品詳細

商品名:『イース・オリジン スペシャルエディション』
ジャンル: アクションRPG
プレイ人数: 1人
プラットフォーム:PlayStation®4、Nintendo Switch™
販売形態: パッケージ
対応言語: 日本語、英語、フランス語、イタリア語、
ドイツ語、スペイン語
発売予定日: 2020年10月1日（木）
希望小売価格: 5,800円（税別）

■PlayStation®4／Nintendo Switch™版
「イース・オリジン」紹介サイト
http://www.3goo.co.jp/product/ys-origin/
■3goo公式サイトURL
http://www.3goo.co.jp/
■DotemuポータルサイトURL
http://corporate.dotemu.com/index.php/ja

期間限定コラボ「メガミラクルフォース」×「英雄伝説 創の軌跡」開催!!

株式会社NTTぷらら、株式会社ズー、アイディアファクトリー株式会社、株式会社アクセルの4社が共同で配信しているスマートフォン向けシミュレーションロールプレイングゲーム（SRPG）「メガミラクルフォース」と「英雄伝説 創の軌跡」のコラボが期間限定で開催中!
本コラボでは、｢英雄伝説 創の軌跡」の「ティオ・プラトー」「リーシャ・マオ」がコラボ限定キャラクターとしてメガミラクルフォースに登場。
限定キャラクターは、限定キャラガチャで入手することができ、ゲーム内でプレイアブルキャラクターとして使用することができます。
また、コラボ限定キャラクターが登場する特別クエストや、「英雄伝説 創の軌跡」のスチルを使用した限定リンクカード（装備）を手に入れることができるパネルミッションなど、盛りだくさんの内容でお楽しみいただけます。



コラボ限定キャラクター
ティオ・プラトー［CV：水橋かおり］



コラボ記念パネルミッション

全ミッション達成で「英雄伝説 創の軌跡」のスチルを使用した限定リンクカード（装備）「暁鐘のクロスベル」が手に入る、特別なパネルミッションに挑戦することができます。



コラボ記念ログインボーナス

コラボ期間中、ログインした日数に応じて以下のログインボーナスを入手できます。1日目から5日目までのログインボーナスで、「英雄伝説 創の軌跡」のスチルを使用した限定リンクカード（装備）「ROUND OF SEVEN」を手に入れることができます。
[1日目] 限定リンクカード（装備）「ROUND OF SEVEN」×1
[2日目] 限定リンクカード（装備）「ROUND OF SEVEN」×1
[3日目] 限定リンクカード（装備）「ROUND OF SEVEN」×1
[4日目] 限定リンクカード（装備）「ROUND OF SEVEN」×1
[5日目] 限定リンクカード（装備）「ROUND OF SEVEN」×1
[6日目] バトルスキップチケット×10
[7日目] ガチャチケット×10
※ログインボーナスの内容は予告なく変更する場合があります。





コラボ特別クエスト「ティオの魔導試練」
[開催期間　～10月8日（木）9: 59]
「ティオ・プラトー」の模倣体が対戦相手として登場する、特別クエストをお楽しみいただけます。

■ゲーム「メガミラクルフォース」概要
タイトル: メガミラクルフォース
ジャンル: 因果を断ち切るシミュレーションロールプレイングゲーム（SRPG）
◆対応OS: Android/iOS
◆価格: 基本プレイ無料（アプリ内課金あり）

ストアURL（iOS）
https://itunes.apple.com/jp/app/id1446245280?l=ja&ls=1&mt=8

ストアURL（Android）
https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.co.plala.megamiracleforce

公式サイト
https://megamiracle-force.com

LINEスタンプ vol.31『創の軌跡（1）BIGスタンプ』配信開始！

シリーズ初となる大型BIGスタンプで登場!!

「英雄伝説 創の軌跡」に登場するキャラクターたちがBIGサイズのオリジナルスタンプになりました♪



販売価格:250円

■『ファルコムLINEスタンプ』シリーズ紹介ページ
https://www.falcom.co.jp/mobile/linestamp.html


9月の
新／衣装替えキャラクターをチェック！
THE LEGEND OF HEROES
暁の軌跡
アカツキノキセキ
いばら姫・リース
控えめな修道服から一転、ゴージャスなドレスを身にまとったリース。彼女の物憂げな表情が、茨にとらわれ長き眠りについた寓話とよくマッチしている。
人魚姫・クレア
《氷の乙女》クレアは人魚姫に。人魚姫の尾びれがドレスの裾の広がりでうまく表現されている。もともと青のイメージが強い彼女にピッタリだ。
毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
９月はエステルが『閃の軌跡Ⅳ』の旅服衣装となって登場したほか、
寓話をモチーフとした衣装替えキャラクターが続々登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj
旅服・エステル
16 歳で『軌跡』シリーズに登場したエステルもいつしか大人の女性に。登場凛々しい表情は頼もしさすら感じさせてくれる。
10月の新規衣装替えキャラクターは？
※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。
© Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.　© USERJOY JAPAN Co., Ltd. All Rights Reserved.　© USERJOY Technology Co., Ltd. All Rights Reserved.

「実は現場を調べた結果、放火の可能性が極めて高いことが判明しました」
前置きなしに、ヨシュアがずばりと切り込んだ。事務的な言葉遣いなのはあえてだろう。
テレサ院長は覚悟していたようだった。
問題なのは、放火だとしてもその目的だった。テレサ院長によれば孤児院にはミラの余裕もなく、また恨まれる覚えもないという。強盗の末に証拠を消すために火を点けた、とか。恨み

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

英雄伝説 空の軌跡2 ～黒のオーブメント～

第3回



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報

好評発売中

著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,200円(税別)

があったから、という線は薄そうだ。

「となると……愉快犯、という可能性がありますが」

　ヨシュアの言葉にテレサ院長が眉をひそめた。

「見知らぬ男、いえ女かもしれませんが、怪しい奴が孤児院の近くをうろついていた、という記憶はありませんか？　時間的には僕らが昼にお伺いした頃から後だと思うんですけれど」

「そうですね……特に……。あの人は違うでしょうし」

　テレサ院長がふと漏らした言葉を、ヨシュアが聞きとがめる。

「あの人、とは？」

「実は……もう少しで私たちは火に巻かれてしまう所だったんです。天井から落ちてきた梁（はり）に扉を塞がれてしまって」

　エステルは息を呑む。遠い過去の自分の記憶が不意に蘇って、目の前に真っ赤な炎が見えた気がした。

「それで？」

　ヨシュアが続きを促した。

「そのときに、扉を破って助けてくれた方がいて……。梁をどけて、私と子どもたちが逃げるのを手伝ってくれたんです」

　エステルは詰めていた息を吐いて、ほっとしてしまう。

「そんなことがあったんだ……」

「はい。私たちを助けてから、町の人たちを呼んでくると言って、すぐに居なくなってしまって……。助けにきてくれたマノリアの方に聞いても、自分たちを呼びに来た男に誰も心当たりがないそうで」

「確かに……放火をしておいて助けるのでは、犯人ではなさそうですが……。気になりますね。どういう雰囲気の人でした？」

　記憶をさらうようにテレサ院長はすこし視線をあげて天井を見つめた。

「ええと。象牙色のコートをまとった　二十代半ばくらいの男性です。見事な銀髪をなさっていました」

「銀髪……」

「夜でしたし、あまりはっきりとはお顔を見られませんでしたが、お若いのに、とても苦労なさったような深い眼差しをしていましたね。悪い方には見えませんでした」

　テレサ院長の言葉に、エステルも頷きを返す。

「ふつうの人には思えないけど、先生と子どもたちを助けたのは事実だし、確かに犯人じゃなさそうね」

　ただ、とっさの行動にしては手馴れているのが気になるといえば気になる。

「ん？　どしたの、ヨシュア。黙っちゃって」

「……いや。なんでもない」
ヨシュアが何か考え込んでいたのは判るのだけど、何を考えていたのかは判らなかった。
ノックの音がした。
テレサ院長のどうぞの声に応えたのはクローゼだった。
「失礼します。あの……先生。お客様がいらっしゃいました」
「お客様？」
「お邪魔するよ」
クローゼの後ろから姿を現したのは、エステルにも見覚えのある顔だった。
「あ……！」
思わず声をあげてしまう。
「おや、昨日会った遊撃士諸君も一緒だったか」
と、恰幅のいい男性が言った。
ルーアンの街の市長、ダルモアだ。その後ろには秘書だというギルバート青年もいる。
「お久しぶりだ、テレサ院長。報せを聞いて飛んできたのだよ。ご無事で本当に良かった」
「ありがとうございます、市長」
「許しがたい所業だな。ジョセフのやつが愛していた建物が、あんなにも無残に……」
「いえ、子どもたちが助かったのであれば、あの人も許してくれると思います」

会話を聞いていると、どうやらあの孤児院はテレサ院長にとって思い出が詰まっている場所だったようだ。それでも、子どもたちさえ無事ならいいと言う。強い人なんだな、と穏やかに笑みを浮かべるテレサ院長を見て、エステルは思った。
「遊撃士諸君。犯人の目処は？」
「調査を始めたばかりですから何とも。ひょっとしたら愉快犯の可能性もあります」
ヨシュアの答えに、ダルモア市長は「そうか」と頷くと、憂鬱そうな顔になる。
「嘆かわしいことだな。この美しいルーアンの地にそのような心の醜い者がいるとは……」
「市長。失礼ですが……」
青年秘書がおそるおそるといった感じで口を挟んでくる。
「ん、なんだね？」
「今回の件……もしや、彼らの仕業ではありませんか？」
「む……」
ギルバートの言葉に、市長が咎めるような視線を送った。
「あの、『彼ら』って？」
「君たちも昨日絡まれただろう？　ルーアンの倉庫街にたむろしているチンピラどもさ」
「あいつらが……？」
エステルは昨日のことを思い出した。大橋を越えた処で絡んできたやつらのことだ。確かに

不愉快な男たちだった。市長が出てくるとあっさりと引き上げていった。いや、エステルたちが遊撃士だと知ると、だったろうか。
「失礼ですが……どうして彼らが怪しいと？」
　ヨシュアが問いかけた。
「彼らは市長には何かと楯突いている。そして、こちらの院長先生と市長が懇意であることは有名な話だからな。だから――」
「ギルバート君！」
「は、はい！」
「憶測で、滅多なことを口にするものではない！」
　市長に一喝され、ギルバートは口をつぐんだ。
「ああ、つい声を荒げてしまったな。まあ、この件は遊撃士諸君に任せたい。期待してもいいのだろうね？」
「うん。まかせて！」
「全力を尽くさせてもらいます」
　エステルとヨシュアは請け負った。
「うむ。頼もしい言葉だ。ところで院長。孤児院がああなってしまって、これからどうするおつもりか」
「……正直、困り果てています。当座の蓄えはありますが、建て直すミラはとても……」
「やはりそうか。うむ……」
　そこでダルモア市長はすこし間を空けた。それから、やや伏し目がちになりながら、話を切りだしたのだ。
「ひとつ提案があるのだが」
「なんでしょう？」
「少し……考えさせて頂けませんか」
　市長の提案とは、王都にある自分の別荘を孤児院として貸し出そう、というものだった。家賃はいらない。再建の目処が立つまでいくらでも滞在してもらって構わないとまで言ってくる。
　市長の申し出に、テレサ院長は顔を伏せた。
　無理もないとエステルも思う。確かにいい話ではあった。けれど王都は遠い。行ってしまえば、もはやルーアンに戻ることができるかどうかわからない。耕した土地も、マノリアの人たちに喜んでもらったハーブ畑も、なによりも、大事な人たちとの思い出の数々も、みんな捨てていくことになるのだ。
　ダルモア市長は、ゆっくり考えてくれと言って秘書とともに部屋から去った。
「先生……」
「クローゼ、あなたにまでそんな顔をしてほしくないわ。近いうちにちゃんと結論を出します。

だから、あなたは学園祭の準備に集中してくださいね」
「はい……」
　クローゼがやや涙ぐみながら頷いた。それから、調査をお願いしますと、エステルとヨシュアに向かってもういちど繰り返す。エステルとしても精一杯頑張るつもりになっていた。
「じゃあ、そろそろルーアンに戻ろうか」
　ヨシュアが言った。これ以上の長居は院長先生を疲れさせるだろうという配慮だ。
　部屋の扉を静かに閉めて、エステルとヨシュア、それからクローゼは何となくお互いに顔を見合わせる。エステルから口を開いた。
「そうだね。とりあえず支部に戻って……」
「とにかく……犯人捜しよね！」
　ヨシュアがこれからの方針を口にしようとしたときだ。階段を駆け上がってくる音がして、小さな女の子が姿を現した。ずいぶんと慌てている。クローゼを見つけると、まっすぐ走ってきて抱きついた。
「クローゼお姉ちゃん！」
「マリィちゃん。ど、どうしたの？」
「クラムのやつが、どこかに行っちゃったのよ！」
「え……？」

　小さなマリィが焦った顔でしゃべりつづける。
「あのオジさんたちが来たときに、お姉ちゃんの後から二階に上がって行ったの。すぐに降りてきて、真っ赤な顔で『ぜったいゆるさない！』とか言って、そのまま飛び出しちゃったの！」
　聞いていたクローゼの顔が徐々に青ざめていった。
「ま、まさか……」
　エステルも事情を理解してしまう。クラムは、「放火の犯人はルーアンのチンピラたち」というギルバートの推測を聞いてしまったに違いない。
　そしてひとりで乗り込んでいったのだ！
「急いでルーアンに引き返しましょ！」
「はい！」
　エステルたちは宿屋を飛び出した。

†　†　†

　街道で追いつくことができれば幸いだったが、残念ながらエステルたちはクラムを見つけることはできずに街に着いてしまった。支部に寄って事情を話し、空いている遊撃士にも協力してもらうよう言付(ことづ)ける。それから街の中を捜した。

《ラングランド大橋》の袂で、橋を渡ってゆく小さな背中をクローゼが見つけた。
けれども運悪く、時刻がちょうど昼になったところで、跳ね橋の上がる時間だった。

「クラム君、待って！」

　クローゼの必死の呼びかけも届かない。

　真ん中から分かれた橋は南と北に吊り上げられて、完全に南北が分断されてしまう。こうなると三十分は降りないとクローゼが青い顔をして言った。そんなに時間がかかっては、クラムは港の倉庫に辿りついてしまう。

　ホテルにある貸しボートの存在を思い出したのはヨシュアだった。

　ボートを借りて、南側へと渡る間、クローゼは拳を握りしめたまま「クラム君、無事でいて」と繰り返し言い続けた。

「ねえ、クローゼ」

　ぽんと軽く肩を叩きながらエステルは声をかけた。できるかぎり明るい声を出す。

「エステルさん……」

「大丈夫。ちゃんと間に合うから。だって——、あのガキってば悪運強いもん！」

「エ、エステル……さん？」

「ルーアンまでの魔獣の出る街道をあいつ、たったひとりで走り抜けたんだよ？」

「あ……」

　街道沿いには導力灯が設置されていて魔獣たちは寄ってこない。だから安全、というのは必ずしも真実ではない。導力灯が壊れている可能性もあれば、人間の悪党が出てくる可能性だってある。

「それに比べれば、もう街中だもの。あの情けない奴ら相手じゃ、ぴんぴんしているに決まっているから！」

　そう軽い調子で言ったけれど、もちろんエステルだって本気で何も心配ないと思っているわけではなかった。気は急いている。だが——今は落ち着くことが肝心なのだ。

　ピューイ！

　鳴き声とともに大きな鳥が一羽、クローゼの肩へと降りてきた。彼女の友人の白い隼——。ジークだ。クローゼが何事かを囁くと、ジークも鳴き声で応えてくる。ほんとうに会話しているように見えてしまう。

　ジークの鳴き声にクローゼが頷いた。

「いちばん奥の、倉庫だそうです！　ジークが、そこに入っていくのを見たって」

「判った」

　ヨシュアは疑って時間をつぶすような事はしなかった。さすがだ、とエステルは思う。

　ボートを操っていたヨシュアが舳先を倉庫街の奥へと向ける。チンピラたちのたむろしている空き倉庫の入口へと辿りついたときには、クローゼも落ち着きを取り戻していた。

扉の外から様子を窺うと、かすかに開いた隙間から中の声が漏れ聞こえてくる。
「とぼけるなよ！　お前たちがやったんだろ！」
クラムの声だった。
クローゼが思わず胸に手をあてて、ほっと息を吐く。
どうやら、不良たち相手に放火事件に関して問い詰めているようだ。男たちの方はクラムの言うことにいっさい取り合っていない。馬鹿にして笑っていた。激昂したクラムが男たちに殴り掛かっていったのが気配で判り、慌ててエステルは扉を開けた。
男たちのひとりがクラムを突き飛ばしたのを見た。
やんちゃでも、まだ年端のいかない子どもだ。おとなの男から突かれれば、軽々と吹っ飛ばされてしまう。床に尻もちをついたところを、胸倉をつかまれて引きずり起こされた。
「っくぅうう！」
苦しそうに呻くクラムを見て、クローゼが叫ぶ。
「やめてください！」
むっとした顔になったのは男たちだ。
「なんだぁ……おまえら？」
「相手は子どもなんですよ！　最低です。恥ずかしくないんですか！」
「言ってくれるじゃねえか」

「おめぇ……。昨日の女だな。遊撃士が付いているからって気を大きくしすぎだぜ。昨日とは違うんだぜ。こっちに何人いると思っているんだ？　そうそうあの市長や腰巾着が助けに来てくれると思うなよ！」
男が言い終わらぬうちに、じゃりっと靴が床をなじる音があちこちからあがる。
手前で遠巻きに見ていた男たちだけでなく、薄暗がりになっている倉庫の奥からも、わらわらと男たちが出てきた。いずれも若い。エステルとさほど変わらない年頃の青年から、歳をとっていても三十歳は越えていないだろう男たちだ。いずれも服は着崩しているし、髪型は妙な格好に逆立てていたりする。
「へへっ、いい度胸だぜ」
「俺たち《レイヴン》の恐ろしさを思い知らせてやるぞ！」
「《レイヴン》……？　あんまり強そうな名前じゃないわね」
「なんだと⁉」
エステルの言葉に、男たちの目の色が変わった。
レイヴンとは渡りガラスのことだ。カラスは鳥の中でも大きいから、強そうといえば強そうなのだが、それを言って喜ばせてやるつもりはエステルにはなかった。
今は、注目を自分の方に集めなければならない。
相手を睨みつけながら、傍らのクローゼだけに聞こえるよう囁く。

「クローゼさん、下がってて」
「僕たちが時間を稼ぐよ。その隙に、あの子を」
　ヨシュアもエステルの意図を察して言葉を添えてくれた。
「いえ……。私にも戦わせてください」
「へ……？」
　クローゼは自分の腰に吊るしていた剣を抜いた。目の前にまっすぐ掲げてから構える。
　凛と、背筋を伸ばして立つその姿は、良家の子女が通う名門校の優等生というよりは、王家の騎士のようだった。手にしたその細い剣は研ぎ澄まされた真剣。レイピア、と呼ばれる。護身用に使われることが多いとはいえ、飾り剣ではなかった。
「剣は、大切な人を護るためのもの。今が、その時だと思います」
　きっぱりとクローゼが言い切る。
　取り巻いている不良たちからさえ、カッコイイの声が思わず漏れていた。
「バカヤロウ！　何、ほけっとしてんだよ！」
　先頭に立っていた男が周りを一喝した。
　慌てたように男たちが左右に首を振る。自分たちの立場を思い出したらしい。
「へっ！　オジョーサマごときに負けるかよ！」
「ナめられてたまるかってんだ」

　やっちまえ、と誰かが言って、それが合図になった。
　棍を構えつつエステルは悟られないよう安堵の息を吐いた。頭に血が昇っているからか、それとも彼らなりに意地があるのか、男たちは、捕まえているクラムを人質にしようとはしなかったのだ。
　短剣や、片手に持てるほどの木の棒を握りしめた手近な六人ほどが、エステルたちに向かってきた。
　だが——所詮は素人である。
　エステルは襲い掛かってくる男たちを冷静に観察していた。そして、あえていちばん近い奴に向かって踏み込む。棍の先端を、相手の顔に向かって勢いよく突きだせば、驚いてそいつはたたらを踏んで立ち止まった。そうして無力化しておいてから、素早く武器を引き寄せ、もうひとりの敵が振りかざした短剣を棍を回転させて弾き飛ばす。
「うお！」
　短い悲鳴をあげて万歳のような格好になった。その腹にひと突き入れる。ぐぇ、とカエルがつぶされたような声をあげて、そいつは床に転がって悶絶した。
「お、おい、レイス！」
「隙あり！」
　仲間に気を取られた男を、エステルは思い切り棍で叩きのめした。

（楽勝！　……っと、クローゼは⁉）
振り返ってクローゼを見る。
心配することはなかった。まるで舞うような軽々とした動きでクローゼは、二人の男を相手にして剣を振るっていたのだ。華麗な剣捌きは一朝一夕で身につくものではない。充分な鍛錬を重ねた者の動きだ。
瞬く間に二人の武器を叩き落とすと、片方の喉元にぴたりと剣先を突きつける。
「終わりです」
「ぐっ……」
「ひゅーっ！　クローゼさん、やるぅ！」
エステルは思わず叫んでいた。
そのときにはヨシュアが相手にした男たちは、既に地面に叩き伏せられている。予想ができていたので、エステルはそちらの心配はしていなかった。
「こ、こいつら化け物か……」
突っかかってこなかった男たちが、遠巻きにしてエステルたちを見ながら、ごくりと唾を呑む。目つきが変わっていた。
（やば。かえって刺激が強すぎた？）
エステルは棍を握る手に力を込めた。あまりに力の差を見せてしまうと、やぶれかぶれになってしまうかもしれない。
（それは、困るんだけど……）
心配したが、そのとき入口のほうから声が掛かった。
「そこまでにしとけや」
「だ、誰だ⁉」
「誰だ、だと？　やれやれ、俺の声も忘れてるとはな」
倉庫の入口に男の影が現れた。逆光になっていてよく見えないが、逆立つ髪をしていて、背中に巨大な剣を背負っている。こちらに向かって歩いてきて、ようやく顔が見えた。
男たちがいっせいに叫ぶ。
「ア、アガットの兄貴！」
エステルも驚いた。
男は、《重剣》のアガットだったのだ！

† † †

アガットはゆっくりと近づいてくると、いきなり目の前の不良を拳ひとつで殴り倒した。
「女に絡む。ガキを殴る……おめえら、ちょっとタルみすぎじゃねえか？」

　低い声で言った。
「うるせぇ、チームを抜けたあんたに今さら——ぐへっ！」
「……何か言ったか、ロッコ？」
　一瞬で間合いを詰めると、アガットは腹に拳を叩き込んだ。くの字に身体を折って、ロッコと呼ばれた男は苦しそうに顔を歪める。
（は、速い！　ん？　……チームを抜けた？）
　エステルは不良の言葉に引っかかった。ひょっとして、アガットはこの男たちと知り合いなのだろうか……。
「あ、兄貴ぃ、カンベンしてくれ！　ほら、ガキなら解放するからよ！」
　そう言って羽交い絞めにしていたクラムを放した。「ねえちゃん！」と叫んで、クラムはクローゼに抱きついた。クローゼが安堵の笑みを浮かべる。
「助かったけど……どうして、あんたが都合よく現れるわけ？」
「ジャンのやつに聞いただけだ」
　エステルの問いかけに、支部の受付の名前をあげて応えたが、それだけの情報でこの倉庫まで辿りついたというのだろうか。
「クラム……」
　今度は女性の声が耳に入る。

（この声は……）
「せ、先生⁉」
「どうしてここが……」
　クラムとクローゼが二人とも驚いた顔をしている。エステルも驚いた。
　姿を現したのはテレサ院長だったのだ。ちらりとアガットを見ると、彼は驚いていない。
（ということは……アガットが連れてきた？）
「マリィから聞きました。……クラム」
「オイラ、あやまんないからな！」
　クラムが言った。
　目には涙を浮かべていた。
「あの……テレサ先生、どうか怒らないであげて下さい」
　クローゼの言葉に、テレサ院長は静かに首を振った。
「いいえ。叱っているのではありませんよ。ねぇ、クラム。よく聞いて。気持ちは判ります。それでも、あなたが犯人に仕返ししても、あの家は戻ってこないわ」
　テレサ院長はゆっくりと諭すように言い聞かせた。
「あなたたちさえ無事なら、先生は他には何も望まないから。だからクラム。もう、危ないことはしないでちょうだい」

クローゼの腰の後ろに隠れていたクラムは、テレサ院長の言葉を聞いて顔をくしゃりと歪めた。そのまま院長の元へと駆け寄ると、腰に抱き着いてわんわんと泣きはじめる。クラムだって、不良たち相手に啖呵を切って怖くなかったはずはない。緊張の糸が切れたのだろう。

「うわぁあああん！」

「本当に、無事で良かった……」

泣き続けるクラムの背をテレサ院長は優しくさすりつづけた。

クラムを連れてさっさと倉庫から出ていくようにアガットがエステルたちに言ってくる。

「それは構いませんけど。アガットさんはどうするんですか？」

「決まってるだろ？」

言いながら、アガットはまだ倉庫の床に叩きのめされたままの男たちや、遠巻きに見ている不良たちを睨みつけた。

「このバカどもが犯人かどうか確かめるんだよ。お灸を据えてやりながらな」

その眼光の鋭さに、男たちが震えあがった。

「なるほど……」

ヨシュアが頷いた。

エステルたちは後をアガットへと任せることにする。彼の強さをエステルたちは充分に知っている。不良たちはたっぷり後悔することになりそうだ。

そのまま大橋を渡って、テレサ院長とクラムを街の門まで送り届けた。

エステルとしては、本当はマノリアの村まで送りたかったけれど、院長先生は大丈夫だからと断ったのだった。

「クローゼ、あなたは学園祭が近いのでしょう？　この子たちだって楽しみにしているのだから、頑張ってちょうだい」

そう言ってクラムの頭を撫でる。クラムがくすぐったそうに目を細めた。いつものイタズラっ子の顔はどこへやら、だ。

別れ際にクラムがぽつりと言う。

「オイラ、弱っちいクセに仕返ししようとしてさ……。かえって姉ちゃんたちに助けられちゃって。……ホント、みっともないよな」

「みっともなくなんかないさ」

意外なことにそう言ったのはヨシュアだった。

「え……？」

「大切なものを守るために身体を張りたくなる気持ち……男だったらあたりまえの事だよ」

「ヨシュア兄ちゃん……」

「僕は、君のことをすごくカッコイイと思った」

ヨシュアが言った。それから、犯人捜しは自分たちがやるから、君は君にしかできないやり

方で先生や子どもたちを守るべきだと諭す。
しばらく言葉なく考えこんでから、クラムは判ったとひとつ大きく頷いた。
テレサ院長とクラムはマノリアの宿屋へと帰っていった。

† † †

真相を知りたいというクローゼとともにエステルたちは遊撃士協会の支部に戻る。
そろそろアガットが戻ってきていると思ったのだ。しかし、扉を開けると中で待っていたのは受付のジャンだけだった。
（そういえば、ジャンさんに倉庫の場所を聞いたって言ったわよね、あいつ）
ジャンに尋ねると、微笑みながら言う。
「うん。別件でルーアンに来たところみたいだったけどね。君たちが来てから少しして院長先生がいらして、それからアガットが来たんだよ。放っておくと、あの院長先生、ひとりで行きそうだったし。むりやり頼んだのさ。何せヤツは《レイヴン》のリーダーを務めていたからな」
「やっぱり！　チームを抜けた、とか言ってたもんね」
ヨシュアも納得したようだ。
「昔のことだけどね。けっこうあいつもやんちゃしてたんだよ」

ジャンが懐かしむような口調で言った。
「そ、そんなやつがよく遊撃士になったわね」
「まあ、ある人と知り合ったのがきっかけでね。それから遊撃士を志して、今じゃすっかり若手のホープだ。人間、変われば変わるもんだよな」
（し、信じられないんですけど！）
意外な過去話だった。
「余計なお喋りは、そのくらいにしておけっての」
ぎくりと身をすくませたのはジャンだ。声に振り返れば、入口の扉を開けてアガットが立っていた。不機嫌そうな顔をしている。
「ったく、好き放題ぺらぺらとしゃべりやがって……」
「いや僕は、嘘は言ってないよ、嘘は」
ぎろりと睨まれた。
「あー、そ、それよりも取り調べは終わったのかい？」
露骨に話を逸らされて、アガットはふんと鼻を鳴らした。
「相変わらず人を喰ったヤツだ」
「はは。誉め言葉と受け取っておくよ」
「まあいい。……あいつらはシロだ。間違いないだろう」

「ホントに〜？　昔の仲間だからって庇ってるんじゃないでしょうね？」
「見くびるんじゃねえ。裏もとった。昨日の夜、船員酒場で呑んだくれていたって証言もある」
「そして、酔った勢いだけでは、あのような周到は放火はできない、ですか……」
ヨシュアがアガットの推理の後半を先回りして言った。
アガットがヨシュアを睨むが、その眼差しには感心したような色が見えた。
「そういうことだ」
「なるほど。とりあえず保留にしても良さそうですね。それに、放火までするほどの度胸がある人たちにも見えなかったし」
「あ、確かに」
「まあ、俺が睨みを利かせておくさ。犯人捜しのついでにな」
「へ？」
「この件は俺が預かる。お前たちには手を引いてもらう」
アガットが言った。
「あ、あんですってぇ！　ちょっとぉ、なに後から来てタワケたこと言ってんの！」
「納得できる説明を聞かせてもらいたいですね」
エステルとヨシュアの反論を、アガットは黙って聞いていた。それから視線をクローゼへと移したかと思うと、ふたたびエステルたちを見つめてきた。咎めるような眼差しを見て、激昂していたエステルの頭がすうっと冷える。
「おまえたちは私情を挟みすぎだ。ただの民間人を戦闘に巻き込みやがって……」
「う……、そ、それはその」
反論できなかった。クローゼも俯いてしまう。
「すみません、私……」
「あんたが謝る必要はねぇ。こいつらの心構えの問題だ」
「……僕たちもそれなりの戦力になると思いますが。せめて手伝いを……」
ヨシュアがそれでも食い下がってくれたが、アガットは、自分の調査には人手は必要ないとあっさり切り捨てた。
「正遊撃士と準遊撃士が同じ任務を希望した場合は正遊撃士が優先される。規約を知らないわけじゃないだろうな？　判ったら、話は終わりだ。悪く思うんじゃねーぞ」
そう言って、アガットは扉を開けて出ていった。
扉が閉まるまで耐えていたが、アガットの背中が見えなくなると、大声で叫んでしまう。
「な、な、何様のつもりよ、アイツ！」
握りしめた手が震えていた。
「悔しいけど、彼の言い分は間違ってはいないからね……」
「すみません……私が剣を抜かなかったら」

　クローゼが頭を下げながら言った。
「それは関係ないってば。こ、事あるごとにあたしたちを目の敵にして……ほんとに、もう、もう、もうってば〜〜〜！」
（腹立つよ〜〜〜！）
　怒りに震えるエステルを宥めるようにジャンが言ってくる。
「まあ、彼も悪気はないんだ。それに、どうやら今回の件……ヤツが追っている事件と関係があるかもしれなくってね……」
「え……」
「アガットさんが？」
「そういえば……別件でルーアンに来たってさっき……」
「詳しいことは話せないんだが、申し訳ないけど犯人捜しはヤツに任せてほしい」
　そう言って頭を下げられてしまった。
（ちょ、ちょっと、そこまでされちゃったら反論できないじゃない）
　エステルはアガットを見返したくて文句を言っているのではない。
「院長先生とあの子たちのために何かしたいって思ってたのに……こんなのって……」
　残念すぎる。
　唇を噛んだ。

「エステル……」
　ヨシュアが気遣うように声を掛けてくれる。アガットの言い分が正しいことはエステルにだって判る。判るからこそ悔しい。
（院長先生や子どもたちと約束したのに……。何もするな、なんて！）
　手のひらが痛くなるほど拳を握りしめてしまう。
「あ……」
　クローゼが何かを思いついた顔をして、ジャンのほうへと振り返ると問いかける。
「あの、じゃあ、民間の行事への協力というのはありなんでしょうか」
「ん？　そうだな。内容にもよるけど、そういう仕事も無論あるよ。王立学園の学園祭なんかは大勢のお客さんが来るから、うちが警備を担当してるしね」
　ジャンの答えを聞いて、クローゼはエステルたちのほうへと顔を向ける。
「でしたら……、エステルさん、ヨシュアさん。その延長で、私たちのお芝居を手伝って頂けないでしょうか？」
　いきなりそんなことを言った。
　話が見えなくて、一瞬、怒りを忘れてエステルは目を白黒させてしまう。
（し、芝居の手伝い？）
「どういうこと？」

「毎年、学園祭の最後には講堂でお芝居があるんです。あの子たちも、とても楽しみにしてくれているんですけど……。実は、とても重要な二つの役が今になっても決まらなくて」

「も、もしかして……」

「その役を、僕たちが？」

「はい」

「え？　え？　ちょ、ちょっと待って！　なんでいきなりそーなるの？　あたし、自慢じゃないけど、お芝居なんてやった事ないよ！　なんであたし!?」

「役が決まらない理由があるんです。台詞は少ないんですけど、お芝居のストーリー上、片方のその役は武術をこなせる必要があって。そこが見所のひとつでもあるんですけど。でも、そこまで武術に長けている生徒って、さすがに居なくて……」

「それはそうだろうね。名門校だから剣術の初歩くらいならば学んでいる生徒もいるだろうけど……」

「そうなんです。同じ年齢だと、エステルさんたちみたいに実戦までこなしているような生徒まではさすがに。でも、それくらいの腕前の方が欲しいんです」

「学生の本分は勉強だからね」

　ヨシュアがまるで生徒たちの親のようなことを言った。

「でも、エステルさんだったら上手くこなせると思うんです」

「な、なるほど……確かに武術だったらちょっぴり自信あるけど……」

　台詞が少ないのなら、なんとかなるかもしれない。

「このままだと中止になってしまうかもしれなくって。あの子たちも毎年楽しみにしているのに……」

　そこまで聞いてエステルはその気になりつつあった。

　落ち込んでいるあの子たちを楽しませることができるのならば、こういう役割もありだろう。ヨシュアだってクラムに言っていた。君は君にしかできないやり方で先生や子どもたちを守るべきだ、と。これはエステルだからこそ可能な役割かもしれない。

「確かにピッタリだと思うよ。で、もうひとつの役は？」

　ヨシュアの問いかけに、何故かクローゼは俯いて口籠ってしまった。

「そ、それは……その。私の口から言うのは……」

「言うのは？」

「は……恥ずかしい、です」

　今度はヨシュアが目を白黒させた。頬をつっと汗がひとつ伝い落ちる。

「恥ずかしい？　そ、それってどういう意味……」

　いつもは冷静沈着なヨシュアが珍しく焦っていた。

「もー、ヨシュアってば、しつこいのは嫌われるわよ。お祭りにも参加できて、あの子たちも

喜んでくれる。しかも、ちゃんと遊撃士のお仕事なんて、一石三鳥ってやつじゃない？　こりゃ、やるっきゃないよね」

「ちょっと待って。ジャンさん……あの、これはさすがに……」

助けを求めてヨシュアがジャンを見た。

けれども、《重剣》のアガットに『人を喰ったヤツ』と評されたジャンはあっさりと言う。

「もちろん、アリさ」

「なっ……」

ヨシュアが絶句した。

「民間への協力、地域への貢献、もろもろ含めて立派に遊撃士の仕事だよ」

「お芝居に出ることが、ですか？」

「お芝居に出ることも、だよ」

さらりとジャンが受ける。

「王立学園のクライマックスを飾るお芝居といえば有名でね。地方の名士たちも来賓として観に来たりするほどなんだよ。学園祭の警護をさりげなくこなすにはいいかもしれないね」

立て板に水で説得にかかった。

「まあ、アガットが来てくれたんで、たいていの任務は彼ひとりでこなせるってのもあるけど」

ちらりと本音も混ざった。

「ぐ……。判りました。何だかイヤな予感がするけど。あの子たちのためなら頑張らせてもらうしかないか」

ついにヨシュアも折れる。

「学園祭はこの週末です。練習もありますし、時間がありません。これからすぐに向かうということでよろしいでしょうか？」

「まあ、エステル君たちには直近で取り掛かってもらう任務もないし。何か人手がいりようだったら、学園のほうに連絡を入れさせてもらうよ」

ジャンの最後の一押しに、エステルたちはそのまますぐにジェニス王立学園へと向かうことになった。最低限の武具は身に付けたままだし、孤児院を調査に行った帰りだから旅支度もそのままで間に合う。

放火犯の動機や行方は気になっているけれど、エステルは既に乗り気になっていた。なによりも、何もできないと思っていたところに、できることが見えたのがエステルには嬉しかったのだ。たぶん、無力感でいっぱいだったエステルを気遣って、クローゼもこの唐突な提案をしてくれたのだろう。

エステルは、人々の役に立つために遊撃士になりたいと思った。嫌がる道理はなかった。

第十一幕　ジェニス王立学園

ジェニス王立学園は主街道を逸れて、森の中の細い道を歩いた先にある。
クローゼが前に言っていたとおり、ルーアンの街からさほど遠くなく、道のりも平坦で危険は少なかった。
門の前に辿りついたときには放課後までまだ時間があり、生徒たちは校舎の中で授業を受けているようだった。校舎の前にある大きな中庭も、人影がまばらでしかも生徒たちの姿は見当たらない。
「なんて言うか……落ち着いた感じのいい場所かも」
「勉強をするにはもってこいの環境みたいだね」
「ふふ、まだ授業中ですから。もう少ししたら、途端に騒がしくなりますよ。学園祭まで日もないですし」
クローゼが言った。
なるほど、とエステルは思う。良家の子女が通う名門校といえど、自分と変わらない年頃なのだ、静かにできるわけがない。
「ほんとは真っ先にジルに紹介したいんですけど、まだ授業中ですから……」
「ジルって?」
「生徒会長です」
「あっ、思い出した。クローゼさんと首席を争っているっていう人ね！」
ひやかしたつもりはなかったが、クローゼが真っ赤になった。
「そ、それはそうですけど。そうじゃなくてその……。ま、まずは学園長室にご案内しますね」
王立学園の責任者であるコリンズ学園長の元へと案内された。
遊撃士がお芝居を手伝うという前代未聞の出来事に、果たして許可が下りるのかと、学園長の前に立ってから不安になったが、エステルの心配は杞憂に終わった。それどころか、学園祭が終わるまで寮に寝泊まりしてもよいと言ってくれたのだ。
やや緊張した学園長との面談を終え、エステルたちは校舎の脇にあるクラブハウスと呼ばれる二階建ての建物へと向かった。生徒たちの部活動などを支援するための施設だという。一階が食堂になっていて、二階に各部の部室や生徒会室などが入っている。
まずは食堂で、伸ばし伸ばしになっていた食事を軽く取る。
他愛もない世間話をしているうちに、終業を知らせる鐘が鳴った。そういえば日曜学校の始業と終業もこんな鐘が鳴ったっけとエステルは懐かしく思い出した。
鐘の音とともに空気が変わった。静謐だった学園内に、ざわざわと活気が満ちてきて、クラブハウスには、部活動を始める生徒たちや早めの夕食を取ろうとする生徒たちが雪崩込んできた。あっという間に学生たちで一杯になってしまう。

「じゃあ、ジルに紹介しますね」
クローゼが立ち上がった。
食堂を出て、二階へと続く階段を昇り、エステルたちは小さな扉の並ぶ廊下に出た。「生徒会室」と書かれた板の掛かる扉へと案内してくれる。
中からは人の声が聞こえた。
「あ、もう来てますね」
クローゼが言った。
ノックをしてから扉を開ける。
「ただいま。ジル、ハンス君」
「あ、クローゼ⁉ 火事の話、聞いたわよ。大変だったそうじゃない」
そう言ったのが、正面のテーブルの奥に座っていた少女だ。細縁の丸い眼鏡を掛けていて、頭の後ろを赤いリボンでくくっている。
「院長先生とチビたちは大丈夫だったのか？」
向かい合うように座っていた少年が振り返りながら言った。
名前から察するに少女のほうがジルで少年のほうがハンスだろう。
孤児院の事を尋ねられたクローゼの顔が曇る。なんとか笑顔を絞りだすと、建物は燃えてしまったが院長先生や子どもたちは無事だった、と簡潔に伝えた。

「元気出しなさいよ。悩んでいたって仕方ないわ。それより、それなら尚のこと、チビちゃんたちが楽しめるよう、学園祭を成功させないとね」
眼鏡の少女が言った。その言葉にクローゼが頷く。
「よし！ あんたが本気を出せば百人力だから期待してるわよ」
椅子から立ち上がってクローゼに近づくと、どんと背中を叩いた。
「痛い、ですよ、ジル」
そう言いながらも、クローゼの顔に笑みが浮かぶ。先ほどのむりやり絞りだしたような笑顔に比べれば自然な笑みだった。どうやら、ジルはクローゼの良い友だちであるようだ。
「痛いってことは生きているってことよ。生きているんなら頑張んなきゃね！」
「ジルったら」
「わはは。んで、さっきから気になっているんだけど……。その人たち、どちらさま？」
探るような視線を受け、エステルのほうから口を開いた。
「初めまして。あたしはエステル」
「ヨシュアです、よろしく」
「それじゃあ、あんたたちがクローゼの言っていた……」
クローゼが頷く。
「約束通り連れてきたわ。二人とも協力してくれるって」

その言葉を聞いた途端に、ジルとハンスの顔が輝いた。
「いやぁ、助かったわー！　初めまして。私、生徒会長を務めているジル・リードナーといいます。今回のお芝居の監督を担当しているわ」
「俺は副会長のハンスだ。脚本と演出を担当している。よろしくな、お二人さん」
二人の喜びようは大きく、エステルのほうが驚いてしまう。その驚きを静める間もなく、眼鏡の少女――ジルがエステルのほうへと近寄ってくると、いきなり二の腕を取って、触ったり摘まんだりし始めた。痛くはないがくすぐったい。女の子同士とはいえ、いきなりの事にエステルはうろたえてしまった。
「ちょ、ちょっと。なに？」
「んー。遊撃士には見えないけど、運動は得意そう。剣は使える？」
「ま、まあ、それなりには……棒術のほうが得意だけど。いちおう父さんに習ったし」
「よっしゃ！」
ジルが片腕を突きあげて、満面の笑みを浮かべた。
「決まりね。あなたには、クローゼと剣で決闘してもらうわ」
「け、決闘!?」
「お芝居で、ですよ」
「クライマックスに騎士同士の決闘があるのよ。でも、クローゼと勝負できる女の子がいなくてねぇ」
「あー」
それはすごく納得できた。準とはいえ遊撃士であるエステルの目から見ても、クローゼの剣さばきは素人とは思えなかった。片方の騎士がクローゼでは、見劣りしない相手を学生の中から探し出すのは難しいだろう。
「この子、学内で行われたフェンシングの大会の優勝者だし」
「へぇ。すっごい！」
「ちなみに決勝で負けたのは、そこにいるハンスね」
「俺が弱いわけじゃないぞ。クローゼが強すぎるんだって」
「あくまで学生レベルの話ですから……」
そう言ってクローゼは謙遜したが、実際に見たエステルの感想でもクローゼの腕は学生のレベルを越えている。なるほど相手役がいないというのも納得できた。
「それにしても女騎士同士の決闘がクライマックスなんて、ユニークなストーリーだね」
ヨシュアのちょっとした感想を聞いたハンスが真面目な顔になって首を捻った。
「女騎士？　なんの話だ？　二人に演じてもらうのは、れっきとした男の騎士役だぜ」
「え」
ヨシュアの顔から、にこやかな笑みが引っ込んだ。

「あの……聞いてもいいかな？　騎士役の女性を探していたんだよね？」
ジルとハンスが同じ動きで頷いた。
「そうよ」
「そうだぜ」
クローゼが急に顔を伏せてしまう。
「え？　え？」
エステルは珍しいものを見ていた。うろたえるヨシュアの顔という。
「しかし、エステルさんもぴったりだけど、ヨシュアさんの方はもう文句の付けようがないわね。これは……期待できるわよ」
「ああ、俺は今かつてないほど、この劇の成功を確信してるぜ」
「ちょ、ちょっと。ええと、その劇……どういう筋書きなのかな？」
ヨシュアの顔に浮かんだ疑問符にようやくジルが気付いたようで、彼女は劇のあらましを語り始めた。
「題名は『白き花のマドリガル』よ」
その題名を聞いて、ヨシュアがかすかに頷いた。さすがに読書家だけあって、内容を多少なりとも知っているらしい。身体を動かすほうが好きなエステルはもちろん初耳だ。
「貴族制度が廃止された頃の王都を舞台にした有名な話なの。貴族の騎士と平民の騎士による王家の姫君をめぐる恋の鞘当て……」
「三角関係ものなの？」
エステルはそこだけ反応してしまった。
「そうそう。しかも、この三人は身分違いだけど、お互いが幼馴染みでさ。これに、貴族勢力と平民勢力の思惑と陰謀が絡んできちゃうわけ。恋のドキドキあり、陰謀のハラハラありの、笑いと涙とアクションと！　これぞ大衆娯楽っていう！　もちろん最後は大団円。文句なしのハッピーエンドよ！」
「へぇ。面白そうじゃない」
「で、でも、あの話はふつうに騎士は男だよね。なぜそれを女の子が？」
ヨシュアは間違いなく焦っていた。
だが、ジルとハンスは二人して互いの目を見交わすと、にんまりと微笑んだのだ。
「おほん！　それが今回の学園祭ならではの、独創的かつ刺激的なアレンジでね。男子と女子が、本来やるべき役をお互い交換するっていう趣向なのさ」
「これは性差別からの脱却、つまりジェンダーからの解放を意味してるの！　……って、理屈こねてむりやり企画立てて通したら、通っちゃった。てへ」
「で、その本音は？」
「そのほうが面白そうだから！」

　胸を張ってジルが言った。
「ジルったらもう……」
「こんなヤツが生徒会長とは世も末だよな」
「その代わりにこの一か月、舞台のあれこれを整えるために睡眠を毎日四時間に抑えたわ！　配役も学内アンケートを参考にして厳選したし、大道具小道具の予算も生徒会費の全支出を調べなおして捻出した！　やるからには、全生徒を楽しませるべく全力を尽くす！」
「そのうち身体壊すぞ」
「ふぇ〜〜〜っ」
　まるで魔獣の行き交う荒野をわずかな仮眠で野営しながら探索している遊撃士のようだ。
「これでいて、学内テストで首席を譲らないんだからなぁ」
「当然よ。だって、生徒会長だもの！　学園祭を言い訳にして成績を落とせないわ。私はできる生徒会長の座を譲るつもりはないもの」
「ジルったらもう……」
　呆れたような口調で、クローゼが同じ言葉を繰り返した。ただ顔は嬉しそうだ。
「あはは。うん、でも確かに面白そうかも」
　すっかり雰囲気に流されて、エステルは芝居が楽しみになった。けれど、たったひとりだけ雰囲気に流されていない者がいたのだ。

「ちょ、ちょっと待った！」
　ヨシュアがますます困惑した顔で問いかける。
「その話の流れで言ったら、僕が演じなくちゃいけない『重要な役』っていうのは……」
「いやぁ、ホント助かったぜ」
　副会長が満面の笑顔で言った。
「クローゼ、ありがとね。いい人を紹介してくれて。ここで断られたら、もう劇には間に合わないところだったわ」
　生徒会長がさりげなく逃げ道を塞いだ。
　既に夕暮れになっていて、夕日が窓を越えて部屋の中のすべてを赤く照らしていた。
　その中でヨシュアの顔だけが青い。
「まさか……」
「あ、あはは……。ごめんなさい、ヨシュアさん……」
　俯いていたクローゼが顔をあげて言う。
「その……、王家の姫君を違和感なくできる男の子がいなくて。ヨシュアさんだったら、ほら……その、ね？」
「お、女役……」
「だ、大丈夫です！　私、思うんです。ヨシュアさんだったら絶対お綺麗だと！」

いや、その励ましはどうだろう、とエステルは思う。案の定、クローゼの言葉に、ヨシュアはがっくりと項垂れた。

「ようし。この演目で、このメンバーなら勝てる！」

ジルが気炎を上げる。

「何に勝つ気なんだか」

「そこの副会長！　すぐに衣装合わせせよ！　役者に合わせて直さないと！」

「はいはい」

既に二人ともヨシュアの返事を聞く気はないらしい。

ヨシュアが黙ってため息をついた。

週末の学園祭まで——あと四日。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.116

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/